

平成29年度第2回総合教育会議 主な意見

資料①

対策(1) (仮称)「不登校対策支援チーム」(以下「チーム」という)の設置の検討について	
金本委員	県内8,800人という多数かつ一人一人事情が異なった不登校児童生徒の不登校の解消に向けて取り組むためにはチームの設置は不可欠である。 チームの構成員としては、同じ心理や福祉の専門家でも個々の専門分野があるので、それぞれ複数のメンバーがいることが望ましい。指導主事も地域の状況を把握した人が対応することが必要である。
京谷委員	不登校の児童生徒に一番必要な「心のリハビリ」を提供するために、チームにおいて、それぞれの専門家が連携を図り、それぞれのニーズにあった支援を提供することが不登校の減少につながるのでは。また心が癒えた後の人とのコミュニケーションという意味でのリハビリにおいては、スポーツ活動やサークル活動が考えられる。幅広い機関・関係者との連携のもとで進めていきたい。
佐藤委員	不登校が長期化する要因は種々あるので、チームの助言を有効にするためには、中学校であれば小学校における本人の情報をスムーズに共有できることがよい指導につながる。しかしながら、個人情報の引き継ぎに十分留意し、本人や保護者の同意を時間をかけてとるように努力することが大切。そのプロセスが信頼関係の構築に結び付くこともある。
	本人の人権を守ることなどが必要な場合も考えられることから、弁護士など法律の専門家もチームには必要では。
	チームとして相談を寄せられやすい条件を整えていくことが大切なので、時間をかけ焦らずに進めていくべき。 チームをとりまく説明図の中で、学校における養護教諭の位置づけがわかりづらいので工夫したほうがよい。
対策(2) 「千葉県版不登校対策指導資料集」(以下「資料集」という)を活用した支援について	
金本委員	資料集の内容には、不登校解消の成功例だけではなく、不登校となった背景やきっかけなど不登校を理解するにあたって、重要な様々な視点をしっかり盛り込むべきである。 不登校対策支援チームが当資料集を活用するのはもちろんのこと、各学校が自立し、自分たちの力で子どもたちを導いていく上で、不登校の未然防止、長期化する不登校への対応の両面についての内容を含んだ資料集の役割が重要である。
京谷委員	資料集により教員の指導力向上が期待できるが、マニュアル通りにいかないのが人の心である。日頃から教員と児童生徒が信頼関係を築いていけば、教員が子どもたちの異変にも気づくことができ、不登校の未然防止につながる。
佐藤委員	校内で、新採用の教員と管理職の間などで、資料集を活用して対話型研修などが行われると、より理解が深まり不登校の予防効果が期待される。
資料②(不登校対策原案)全般について	
金本委員	学び直しの環境についてのニーズが多様化している中で、三部制の定時制高校が成果を上げている。中学校においても同様の考え方を応用展開していくことができると効果的である。
佐藤委員	中学校において三部制の考え方を取り入れるべきという理由としては、不登校の状態にあって、学校に行きたくても行けず、勉強が遅れるのではないかと焦りを感じてしまう子どもたちにとって、普通に授業を受ける中で、気持ちを開いていくことができる環境づくりの配慮が必要だと考えるためである。
	特別支援学校、特別支援学級では、不登校傾向について、在学中はきめ細かい指導により課題として見えづらいが、社会に出てから困難さが明白になることもある。早期から、中・長期的な見通しをもとに、本人・保護者に働きかけていくことが重要である。
井出委員	魅力ある学校づくりを進めるためには、児童生徒がどのような場に居心地の良さを感じているかを把握し、その居場所を創出していくことが重要。子どもたちの8割は同世代に悩みを打ち明けており、友人とのつながりの中に居場所を見出している。一方、人間関係の煩わしさを避ける世相もあり、社会性の低下が見受けられる。社会性を育成するために、生徒に対する生徒による支援である「ピア・サポート」の活動を進めていくことを提案する。生きていくための力の育成、集団づくりに寄与し、生徒が作り出していく不登校を生まない魅力ある学校づくりにつながるものと考えている。
岡本委員	不登校になってからの対策(治療)はもちろん重要だが、不登校にならないための予防、身体作り、自分の力で治す自己免疫力が、さらに重要だと考える。チーム学校の体制づくりや支援シートの情報共有などは、やや役人的発想であり、もっと現場の意見を聞いてみたい。不登校の児童・生徒に対して「どうい学校なら行きたいと思うか」というアンケートを取り、そのような学校づくりにつなげるなどして、本当の意味で魅力ある学校づくりを考えていくべき。
内藤教育長	不登校の子どもたちは、今のままでよいとは思っていない。自分を変えるチャンスとして進学時が考えられる。不登校を繰り返したくないと考えている生徒を受け入れる高校を整備していくことが重要。生徒の多様なニーズにこたえる教育環境を整えるため、教育委員会としては定時制、通信制高校の充実を図っていく。
	フリースクールを居場所としている子どもたちが数多くおり、学校・家庭とフリースクールが連携を深めていくことが大切。不登校の親の支援につながる親の会との連携も必要。フリースクールが行っている支援プログラムなどのノウハウを活用させてもらうなどして、一人一人の子どもにとってより良い支援を進めていきたい。
森田知事	自信がない子ども、自己を表現できない子どもが増えているように思われる。以前森田塾で合宿を行っていた際に、自信のなさそうな子どもにも班長という役割を与えたところ、途中から自ら動き出し人間関係を学んでいった。できていることをほめると顔つきも変わってくる。それぞれの子どもができることを見出し、無理なく引っ張り上げる方法を考えていくことが大切ではないか。
今後の会議のテーマ等について	
金本委員	不登校対策においても、いかに教師が関わっていくかということが一番重要。失敗しても、それを次に向かう力にし、現状を受け入れていくことのできる教師の資質能力の向上について、今後議論していきたい。
森田知事	教師については「恐れるな」がキーワードになると思われる。教師はみんな情熱を持っているので、恐れることなく、様々なことにぶつかってほしい。
京谷委員	2020年東京オリンピック・パラリンピックに向けて、不登校の子どもたちも引っ張り出して、千葉県としてどのように盛り上げていくべきか今後話し合っていきたい。